

(2005年2月22日・ワシントンDC開発フォーラムBBL席上資料)

国際開発イニシアティブを途上国の開発にどう生かすか
- MDGs、PRSP、調和化・整合化と日本の役割 -

在バングラデシュ日本大使館
経済協力班長・紀谷昌彦

1. 途上国から見た国際開発イニシアティブ：バングラデシュの事例から

(1) 総論

(イ) 国際開発イニシアティブは「天から降ってくるもの」

(ボトムアップのオーナーシップとの乖離)

選択的受容・内在化のプロセス

総合戦略(内容/手続き)・セクター戦略を国の視点から再構成

(ロ) 途上国が国際開発イニシアティブを受け入れる動機

(a) 真に有用だから?

(b) ドナーの関心を引きつけるのに有用だから?

(c) 有用ではないが無理やり押し付けられたから?

ドナーが設定する土俵に対する心理的反発に配慮する必要

(2) 具体的事例

(イ) ミレニアム開発目標(MDGs)

政府・メディアともすんなりと受け入れ

ドナーは必ずしも熱心でない(実施面と直接の関わりが少ない)

実際には統計面で多くの課題あり

南アジア開発目標(SDGs)との関係

(ロ) 貧困削減戦略文書(PRSP)

政府内の見方は「有意義」「押し付け」の双方あり

(「本来不要だがドナーのために作っている」との感情も)

世銀・ADB・DFIDが強い関心あり

結局は総花的かつ実施が課題・・・「PRSPはきっかけのひとつ」?

(ハ) 調和化・整合化

当初はほとんど関心なし(エチオピアなど国によっては活用)

パリ・フォーラム(本年2-3月)への大臣出席を機に「対応」

今後の見通しは不明

(ニ) 分野別イニシアティブ

教育ファストトラック・イニシアティブ(EFA-FIT)、世界エイズ基金、
防災等・・・従来の取り組みとの整合性が課題に

2. 日本にとっての国際開発イニシアティブ

(1) これまでの取り組み

TICAD、DAC 新開発戦略：日本が先導！
MDGs、PRSP：貧困削減、目標設定型アプローチへの慎重姿勢が基調に？
調和化：持ち直し！ただし国内的制約が課題。そもそも関心は？
平和構築：非軍事的な平和への貢献としてアピールあり
人間の安全保障：努力中だが、国連等の場では概念を巡り対立あり
能力構築：「技術協力の有用性の再理論化」を超えてどう世界に訴えるか
南南協力：勢力分散傾向、しかし他ドナーも「地域協力」で取り組み
防災、水、IT・・・：一過性で終わらせないために
東アジア開発イニシアティブ(IDEA)：貴重な東アジアカードをどうするか

(2) 検討の視角

基本政策か、イベント対応か
インプット（投入量）か、アウトプット（成果）か
資金か、人か、知恵か
日本の顔・グリップの維持か、他ドナーの巻き込み・スケールアップか
対外発表か、現地での実施か（フォローアップの問題とも関連）
そもそも何が目的なのか（どちらを向いているのか）- 途上国現地の事情は？

(3) 今後の課題

(イ) 基本政策

日本は、開発問題に対して、何故どのように取り組むのか
日本はどのような国際開発イニシアティブを提唱するのか

(ロ) 政策担当部局・途上国現地・研究機関の各々の強化と相互の連携

- (a) 政策担当部局：先取りアジェンダ設定、政策意識の強化、周知徹底
 - (b) 途上国現地：まず現地で実施、更にニーズをフィードバック(能力不足！)
 - (c) 研究機関：理論化、過去事例の整理、啓蒙宣伝、「他流試合」
- 相互の連携：縦割りの排除により相互のリソースを最大限に活用
特に、政策担当部局の調整役としての責任は大きい

(ハ) 幅広い国民的論議

国民の支持がない政策は展開できない
技術的な議論をわかりやすいことばで国民に語ることの大切さ
結局は「国のかたち」「世界における日本のありかた」

(4) おわりに

それぞれの「現場」から行動を起こすことの大切さ
そこから物事が広がっていく

(以上)